

はじめに

民謡と民話は、共に日本各地で口承されてきた伝承文化である。民謡は地域の生活や労働に根ざした歌であり、民話は神話や伝説を物語として語り継いできた。両者は共同体の文化を形成する重要な要素となっている。

本研究では、民謡と民話の共通点を整理し、地域文化の継承における役割を考察する。さらに、民謡が民話の記憶媒体として機能する可能性に着目し、その伝播や変化を比較することで、継承のあり方を明らかにする。

民謡と民話に共通する文化的要素

1 地域性

民謡と民話は地域の特色を反映し、その土地の気候、産業、信仰などが表現されている。

民謡のひとつ「ハイヤ節」を例に採ると、同じ歌が土地ごとの影響を受け、旋律や歌詞が変化しながら、地域独自の民謡へと発展した^{【注1】}。民謡もまた、地域の伝説や社会的価値観を映し、その土地に根付いた物語として受け継がれている。日本各地には村を守る神々や地形にまつわる民話があり、それぞれの地域の文化や自然環境が色濃く反映されている。

2 口承性

民謡と民話はともに口承文化として伝

えられ、歌い手や語り手によって表現が変化する流動的な性質を持つ。

民謡は、地域や世代、歌い手によって歌詞や旋律が変化することが多い。民謡も語り手によつて表現が変化し、地方ごとに結末や登場人物の設定が異なることがある。どちらも地域の風習を反映したものといえる。

3 実用性

民謡と民話は、実際の生活の中で重要な役割を果たしてきた。

民謡は、共同作業の効率を上げるだけでなく、危険を回避する目的でも用いられた。たとえば、労作歌は作業のリズムを整える役割を持ち、また道中では獣に襲われないよう警戒を促すためにも歌われた。民話は地域のルールを伝え、社会の秩序を維持する役割を担っていた。それは、現代に制作された「海ノ民話アニメーション」にも反映されており、海難事故や自然の危険性を伝える物語が多く含まれている。こうした話は、危険を回避するための暗黙のルールとして受け継がれてきた。

4 信仰性

民謡と民話の多くは、地域の信仰と深く結びつき、神々や自然への畏敬の念を表現する手段となってきた。民謡では、五穀豊穡や海上の安全を願う歌など、生活の中の祈りとともに伝承されてきた。民話においても、神や妖怪の存在が描かれ、人々が自然と共存する意識を育んできた。禁忌や安全祈願を伝える民謡も多く、これらは地域の信仰と密接に関わりながら、社会の教訓や知恵として受け継がれている。

おけさ節は、新潟県全域で歌われている民謡であり、「おけさ」の名の由来にはいくつかの説がある。中でも広く知られるのが、佐渡島に伝わる「猫の恩返し」の民話である。

むかし、貧しい老夫婦に飼われていた猫が恩返しのために人間の姿となり、「おけい」と名乗る遊女として働き、暮らしを助けたという。おけいは非常に美しく、歌や踊りにも優れ、隣りに評判となった。ある夜、おけいの正体を見しまった商人は、おけいから口外しないようにと念を押されたが、その約束を破ってしまった。その結果、商人の乗った船は嵐に見舞われ、彼とおけいの行方はわからなくなった。やがて、おけいが歌っていた「おけい節」は時代とともに「おけさ節」へと変わり、広まっていたと伝えられている（浜口吉沢、1976）。

「おけさ正直ならそばにも寝しよが、おけさ猫のせうでじゃれかかる（松川、1927）
（解）おけさが素直なら側で寝てくれるだろうが、おけさは猫の性でふざけるだけである（竹内、2002）
へおけさおけさと名はよいけれど、見れば見るほど器量もよい
（解）おけさの芸は評判が高く、容姿もまた魅力的である

新潟には猫にまつわる伝説が数多く存在し、その影響を受けて、民謡の歌詞から猫の恩返しの物語が生まれたのだらう^{【注2】}。また、おけさ節は有名な民謡であったため、恩返し物語と結びつけることで、道徳的な教訓を伝える役割も果たしたと考えられる。近年、この物語はアニメーション化され、民謡と民話が融合した新たな形

民謡と民話は異なる形で発展しつつも、地域の生活や時代背景と結びつき、世代を超えて受け継がれている。（日本財団海と日本PROJECT・海ノ民話のまちプロジェクト（2024）「海ノ民話の世界」文藝春秋、413）

民謡と民話の関係性と継承の役割

1 民話から派生した民謡の事例

（1）やちや坊節

やちや坊節は鹿児島奄美群島に伝わる民謡であり、伝説の人物「やちや坊」に由来する。やちや坊は、山で育った子どもで、島中を自由自在に駆け回り、畑の野菜を盗むなどのいたずらをして村人たちを困らせていた。一方で、盗んだ収穫物の一部を貧しい人々に分け与えることもあり、その行動から憎めない人物として民話にも描かれている。その姿は島の人々の心を打ち、奄美大島や喜界島ではヒーロー的な存在として語り継がれ、民話としても残されている。そして、やちや坊の伝説は奄美群島一帯で民謡としても歌われるようになった（日本放送協会、1993・片倉、2014）。

「やちやばばやちやばしまぬ無ぬやちやばば やちやばきもしやけや山ぬぞだち
（解）やちや坊はなんと可哀そうな男よ故郷も家もなく山で生涯を送る（文潮、1983）

やちや坊節は正月などの祝いの席でも歌われ、歌い継がれてきた。また、やちや坊が住んでいたとされる伝説の岩屋が今も奄美大島に残されており、供え物を捧げる光景

で伝承されている。

民謡と民話の現代的継承

近年、民謡や民話の伝承方法は変化しつつあり、デジタル技術や映像メディアを活用した新たな取り組みが進められている。その一例として、「海ノ民話のまちプロジェクト」では、全国の海にまつわる民話をアニメーション化し、幅広い世代に伝える試みが行われている。

例えば、山梨県富士川町に伝わる「まりつき唄」は、姉妹の悲劇的な物語をもとにした民謡であり、わらべうたとして伝承されてきた。かつて天神ヶ滝では水難事故が多発し、子どもたちはこの歌を通じて海の危険を学んだと考えられる（一般社団法人日本昔ばなし協会、2024）。こうした民謡の伝承は、

現代では歌い継がれる機会が減少しているが、アニメーションという新たな手法を通じて再び注目されるようになった（図2）。



図2 海ノ民話アニメーション「まりつき唄」
鞠はもともと上に投げて遊ぶものだったが、ゴム鞠の普及により弾ませる遊びへと変化した。アニメーション化によって、その変遷が直感的に理解できるようになっている

従来の口承文化は、歌い手や語り手を介して伝えられてきたが、アニメーションを通じて伝承では、視聴者がより直感的に物語を理解できるため、地域文化の継承に新たな可能性をもたらしている。

まとめ

本研究では、民謡が民話の記憶媒体として機能し、民謡が人々に親しまれることで民話の内容も長く記憶されるという相互作用が確認された。具体的な事例を通じて、民謡が地域の歴史や文化を伝承する手段として機能していることが明らかにされた。現代ではアニメーションを活用した新たな継承方法が登場し、伝承の形が変化している。今後は、こうした変化が、地域社会にどのような影響を与えるのかを検討することが重要となるだろう。

が見られる（図1）。やちや坊が単なる伝説上の人物ではなく、地域の文化と密接に結びついた存在であることが伝わってくる。

（2）おけさ節

価値の再発見⑧

民謡と民話のつながり

—文化を伝える歌と物語—

佐藤千春（一般社団法人民俗文化興隆協会）

キーワード 民謡、民話、口承文化、継承、アニメーション

【注1】「ハイヤ節」は熊本県天草市牛深町に伝わる民謡である。北前船の往来によって日本各地に広まり、地域ごとに独自の民謡へと発展した。
【注2】歌詞の「猫」は動物の名称ではなく、遊女の別名として使われていた。一部の地域では「猫が恩返しをする」話が遊女文化とも結びついている。（竹内勉、2018）「日本民謡辞典Ⅱ 関東・甲信越・北陸・東海」朝倉書店、388頁